

# 大学における “つながり”の重要性

芝浦工業大学 准教授

谷田川 ルミ

## テーマ3 大学における“つながり”の重要性

テーマ  
3

大学における「つながり」の重要性

### 1. はじめに

2000年代に入って以降、四年制大学進学率は5割を超えるようになり、大学に行くことは珍しいことではなくなった。しかし、進学率が上昇するに伴い、目的意識が薄い学生が大学に進学してくることが多くなり、結果として、入学後の不適応や学業不振、ひいては休学、中退に至る学生も増加してきている現状がある。

前回(2012年)調査の結果からは、こうした大学からの離脱予備軍ともいえる学生たちは、授業や教育システムといった学業面での不適応に加えて、大学内の友人関係が希薄であることが明らかになっている(山田2013、谷田川2013)。大学生が大学生活を送るにあたっては、友人の存在は大きな意味を持っているのである。この結果を受けて、今回(2016年)調査においては、友人関係に加えて、教員、職員を含む大学内の人間関係のグラデーションに注目し、大学生の大学内における人間関係、すなわち“つながり”が、前回調査で明らかとなった大学生生活満足度や大学へのコミットメントのみならず、学習活動や成長実感にどのような影響を与えているかという点にも広げて検討を行う。

ここで、“つながり”に関連して「ソーシャルキャピタル(Social Capital)」という概念を紹介したい。「ソーシャルキャピタル」とは、日本語で「社会関係資本」と呼ばれており、社会学、経済学、政治学などで広く用いられている概念である。「ソーシャルキャピタル」については、これまで多くの論者による議論がなされているが、ここでは、社会学や教育学の分野でよく取り上げられる論として、フランスの社会学者であるピエール・ブルデューとアメリカの政治学者であるロバート・パットナムの定義を参考までに紹介する。

ピエール・ブルデューによると、ソーシャルキャピタルとは、「人脈」「コネ」「顔の広さ」といった当人にとってメリットのある人間関係の総体であると説明している。また、ロバート・パットナムは、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった人々の協調行動が、社会の効率性を改善するとしている。どちらかといえば、ブルデューは「個人」、パットナムは「社会」への利益に着目した定義となっているが、いずれにしても人々を取り巻く様々な人的ネットワークの豊かさは、個人が社会で生きていくうえでの強みでもあり、人々の生活そのもののみならず、幸福度や生活満足度を上げると言われている。また、社会を維持、発展、改善していくうえでも非常に有効なも

のであるという考え方である。

この社会関係資本を学校教育の成果の一つである「学力」といった点に着目すると、子どもの学力も社会関係資本の多寡との相関が高いことが明らかにされている。例えば志水(2014)は、平成に入ってから全国の学力テストの結果の分析を行い、子どもたちの学力は「離婚率」、「持ち家率」、「不登校率」の三つの要因との関連が高いことを明らかにし、「離婚率」=家庭内における家族との“つながり”、「持ち家率」=地域・近隣社会との“つながり”、「不登校率」=学校における友人・教師との“つながり”といった子どもを取り巻く“つながり”、すなわち社会関係資本が豊かな地域の子どものほど、学力が高いと説明した。この社会関係資本と学力という、一見、距離があるように思える二者に強い相関がある理由の一つとしては、子どもが本当に落ちこぼれてしまう状況になる前に、“つながり”によってサポートを受けることができる、すなわち、セーフティネットのような機能があるかどうか、ということなのであろう。

このような“つながり”の力は大学生にも働いているのではないだろうか。社会関係資本、すなわち人間関係による“つながり”の多寡は、一見、大学教育の本質とは距離があるように見えながら、実は彼らの大学満足度のみならず、学習意欲や成長実感といった大学教育の本質にも大きく影響しているのではないか。さらに言えば、学業不振や経済問題などを抱えて、大学を中退してしまう、してしまいそうな学生にとっては、“つながり”というセーフティネットがあるかないかによって、大学内にとどまることができるかどうかにかかわってくるのではないだろうか。

本稿ではこのような一つの仮説を持って、大学生の大学内での社会関係資本=“つながり”に注目して分析を行い、大学内での“つながり”を育む大学のあり方について考える基礎的な知見を示したい。

### 2. 大学生の“つながり”の現状

#### 1) 大学内の友人との“つながり”

大学生たちの大学内の友人との“つながり”はどのようになっているのだろうか。本調査では、大学内の友人との“つながり”を把握するため、「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」「悩み事を相談できる友だち」「学習や広く社会の課題などについて議論をする友だち」「学習やスポーツで競い合う友だち」「尊敬できる友だち」「情

報交換（授業や就職活動などについて）する友だち」といったような関係性を持った友人が大学内に何人いるかをたずねている。分析結果は図3-1のとおりである。

「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」については「いない」「1人」の回答割合が全項目の中で最も少なく、「4～6人」が最も高くなっている。話をするような浅く広い気軽な人間関係については数人から10人以上の人数のネットワークがあることがうかがわれる。一方、同じく浅く広いネットワークである「情報交換（授業や就職活動などについて）する友だち」については、「いない」が12.9%となっており、友人関係において、気軽に話をする事と目的を持って情報交換をすることは別の次元の付き合い方をしている可能性が考えられる。同様の傾向を示しているのが「学習や広く社会の課題などについて議論をする友だち」で「いない」と回答している割合が25.7%となっており、調査対象の大学生の約4分の1が議論をしたりする友人がいないと回答している。

深い付き合いになると思われる「悩み事を相談できる友だち」については、19.2%が「いない」と回答しているが、41.6%は「4～6人」いると回答しており、情報交換や議論をする友人よりも悩み事を相談できる友人のほうが人間関係のネットワークとして定着しているものと考えられる。一方で「尊敬できる友だち」については24.3%が、「学習やスポーツで競い合う友だち」については40.2%が「いない」と回答している。

総合的にみて、話をしたり、遊んだり、相談したりできる友人はいるが、授業や就職活動、学習といった内容を相談できる友人のネットワークを持っていない学生は全体の4分の1程度存在する。友人の数が多ければいいというものではないが、人的ネットワークの強弱、「何かあった時」のセーフティネットの役割を果たすという点からは、重要な指標であると言えるだろう。大学は高

校と異なり、自由度の高い空間である。何事もないときにはそれなりにやっていくことができるだろうが、困りごとや悩みごとが発生した際には、気軽に相談したり情報交換したりできる友人の存在に助けられることは多いものと考えられる。大学のように自由度が高く自己責任が問われる場においては、やはり社会関係資本＝“つながり”の果たす役割は大きい。

大学生活において、授業や学習の内容にかかわる情報交換をしたり、議論をしたりする友人の存在は、大学における学びを充実させたり、戦略的に大学生活をサバイバルするためには必要なネットワークであると考えられる。気軽に話したり遊んだりする関係と併せて、様々な友人関係のバリエーションを持っていることが、大学における学びや大学生活そのものの豊かさに関わってくるのではないだろうか。

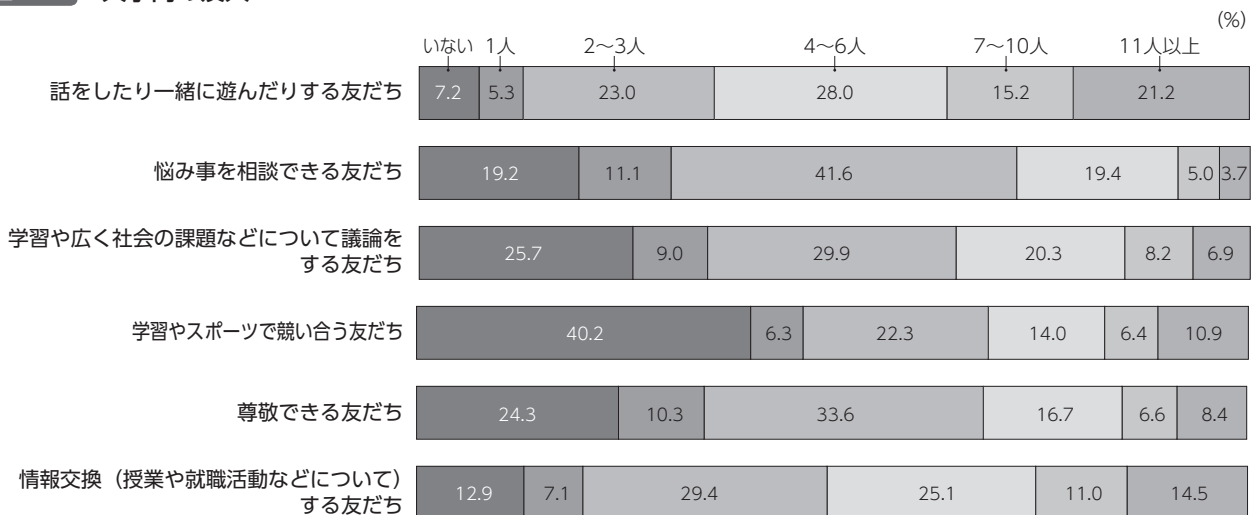
### 2) 教員、職員との“つながり”

大学内の人間関係で友人関係に続いて重要となってくるのが教員、職員との関係であろう。それでは、教員、職員との人間関係の現状をみていこう（図表割愛）。

大学職員との関係では「気軽に相談できる」職員が「いる」と回答した割合が27.5%、「ふだんから気にかけてくれる」23.5%、「厳しいことを言ってくれる」23.5%となっており、ある程度頼れる職員がいるのは全体の2割程度となっている。一方、大学教員との関係では、「気軽に相談できる」先生が「いる」と回答した割合は39.3%、「ふだんから気にかけてくれる」38.0%、「厳しいことを言ってくれる」39.4%、「授業や研究活動以外の場で交流（雑談・食事）がある」31.5%となっており、4割程度の大学生は、いざという時に頼れそうな教員が「いる」ようである。

こうした教職員との関係は、学年が進むごとに変化していくものと思われる。そこで学年別に分析を行った結

図3-1 大学内の友人



果が図3-2である。大学職員との関係は、学年別に大きな変化は見られないが、教員との関係は、学年が進むごとに関係性が密になることが見てとれる。特に3年生、4年生の段階で「いる」と回答している割合が大きく増加している。これは、多くの大学において、3、4年次から専門教育の授業が増え、ゼミナールが始まったりすることが大きく関係しているように思われる。こうした専門の授業やゼミナールは少人数であることが多く、教員と個人的に話をしたり、指導を受けたりする機会を持つことで人間関係を深めているのではないだろうか。

教職員との関係は、年齢差や立場の差、そして、特に教員の場合は「評価するもの」と「評価されるもの」といった上下関係が存在するため、友人関係と比べると距離のあるものになりがちである。しかし、教員とのかかわりによって、学習面での学びにとどまらず、これからの人生に役立つたくさんの物事を学ぶことができると考えられる。また、大学職員との関係についても、事務手続き等のやり取りをとおして、大学内での年長者とのかかわり方や礼儀などを学ぶ機会になり得る。何より、大学生活において何かあったら頼ったり相談したりできる関係にある年長者という存在の有無は、大学生たちが大学生活を営む上での大きな支えになるものと考えられる。

### 3. “つながり”と大学生活へのコミットメント

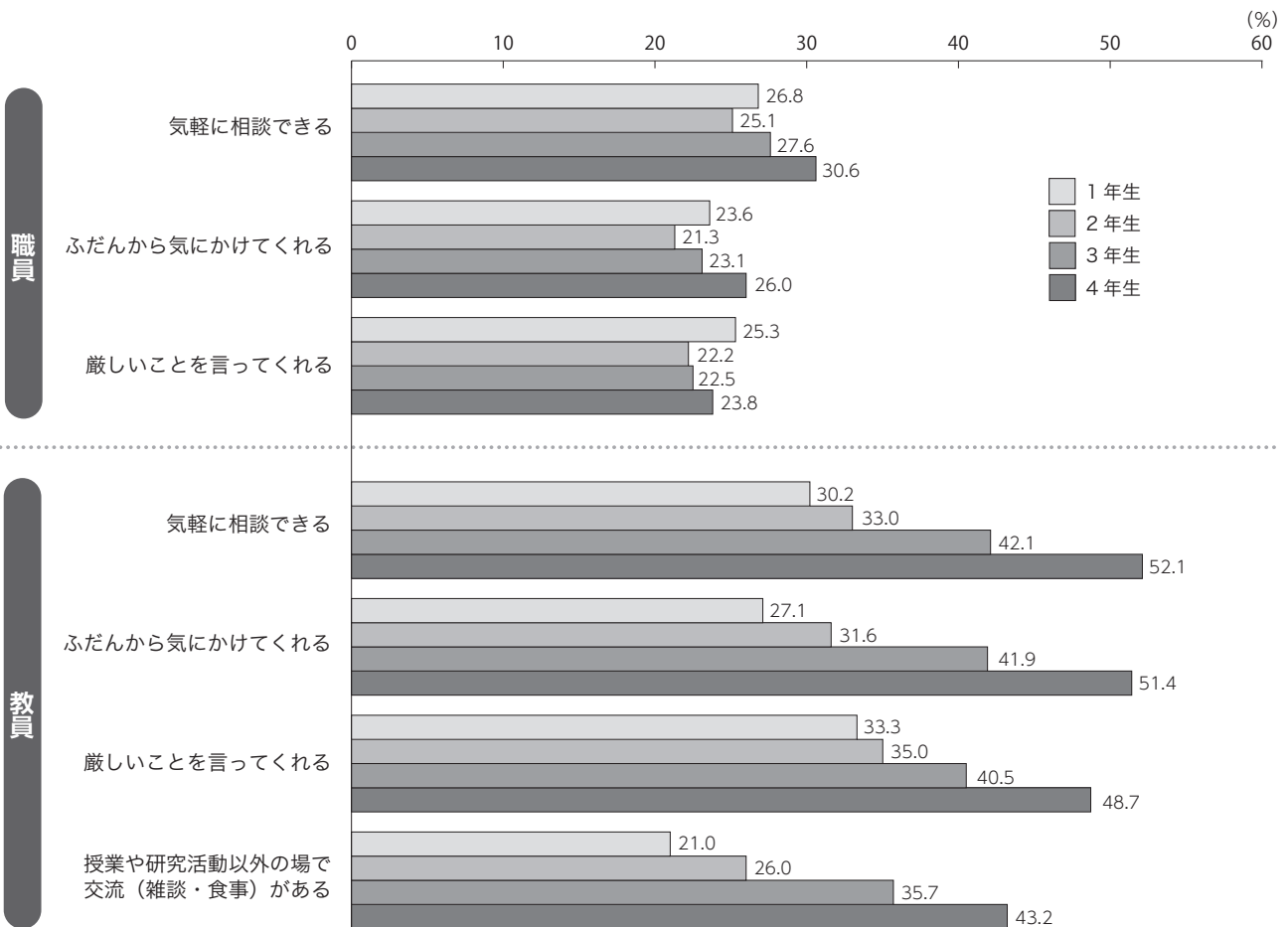
それでは、大学生の大学内の友人関係、教職員との関係といった大学内の“つながり”と大学生活へのコミットメントとの関係はどうなっているのかをみていこう。

分析にあたって、大学生の大学内の友人関係と教員、職員との関係をそれぞれの項目について得点化して9つのグループを作成した。変数の操作方法としては、「大学内の友人のつながり」として、「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」、「悩み事を相談できる友だち」、「学習や広く社会の課題などについて議論する友だち」、「学習やスポーツで競い合う友だち」、「尊敬できる友だち」、「情報交換（授業や就職活動などについて）する友だち」の6項目について、回答選択肢の「0人」を1点、「1人」を2点、「2～3人」を3点、「4～6人」を4点、「7～10人」を5点、「11人以上」を6点として、合計点数を算出した。点数は6～36点の間で分布するが、おおよそ3分の1ずつになるように6～16点を「友人低群」、17～22点を「友人中群」、23～36点を「友人高群」の3群に分割して類型を作成した。

「大学内の教職員とのつながり」については、職員に対して「気軽に相談できる」、「ふだんから気にかけてくれる」、「厳しいことを言ってくれる」、教員に対して「気

テーマ  
3  
大学における「つながり」の重要性

図3-2 教職員との関係



注) 「いる」の%。

軽に相談できる」、「ふだんから気にかけてくれる」、「厳しいことを言ってくれる」、「授業や研究活動以外の場で交流（雑談・食事）がある」の計7項目について、回答選択肢の「いる」を1点、「いない」を2点として合計点数を算出した。点数は7～14点の間で分布し、こちらもおおよそ3分の1ずつになるように3群に分け、7～10点を「教職員高群」、11～13点を「教職員中群」、14点を「教職員低群」の3群を作成した。

そして、「友人高群－教職員高群」「友人高群－教職員中群」「友人高群－教職員低群」「友人中群－教職員高群」「友人中群－教職員中群」「友人中群－教職員低群」「友人低群－教職員高群」「友人低群－教職員中群」「友人低群－教職員低群」の9つのカテゴリを作成し、それらの組み合わせによって、大学生の大学内におけるつながり方による大学生活へのコミットメントにどのような違いがあるのかについて分析を行った。

### 1) “つながり” と大学生生活満足度

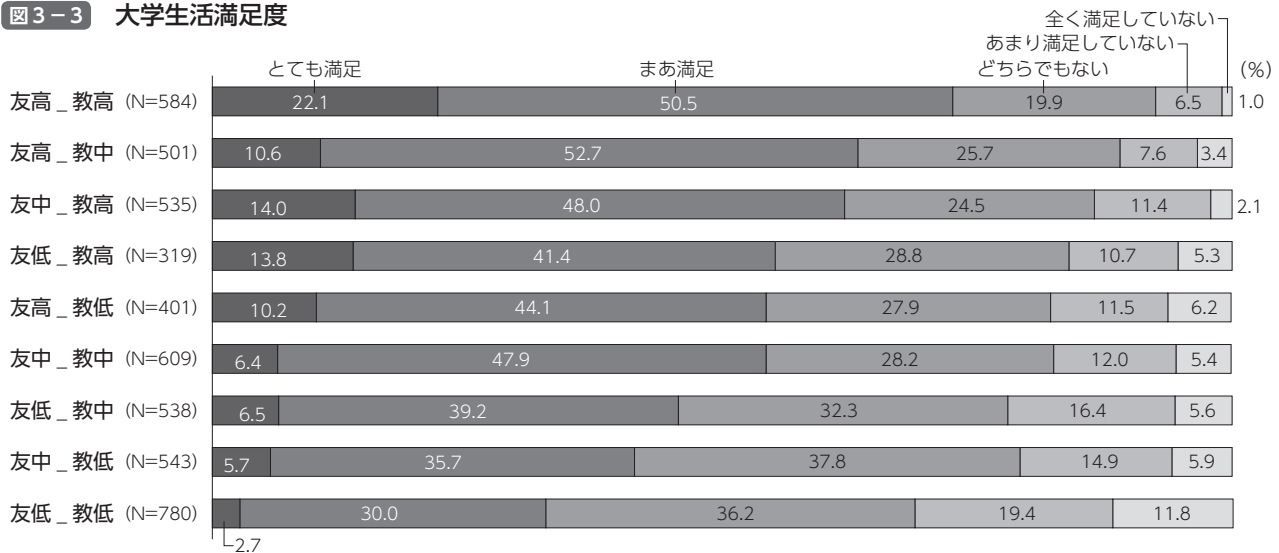
まず、大学生活における総合的な大学生生活満足度と大学内の“つながり”との関係についての分析結果を **図3-3** に示した。

最も大学生活に「満足（とても+まあ）」と回答した割合が高いのは「友人高群－教職員高群」で、7割以上が大学生活に「満足」している。続いて「友人高群－教職員中群」、「友人中群－教職員高群」となっている。

一方、大学生活に「満足していない（あまり+全く）」と回答した割合が高いのは「友人低群－教職員低群」、「友人低群－教職員中群」、「友人中群－教職員低群」の順となっている。この結果から、大学生活に満足している学生たちは、友人や教員、職員との“つながり”が多く、“つながり”が少ない大学生ほど大学生活に満足していないという傾向がみとれる。

テーマ 3 大学における「つながり」の重要性

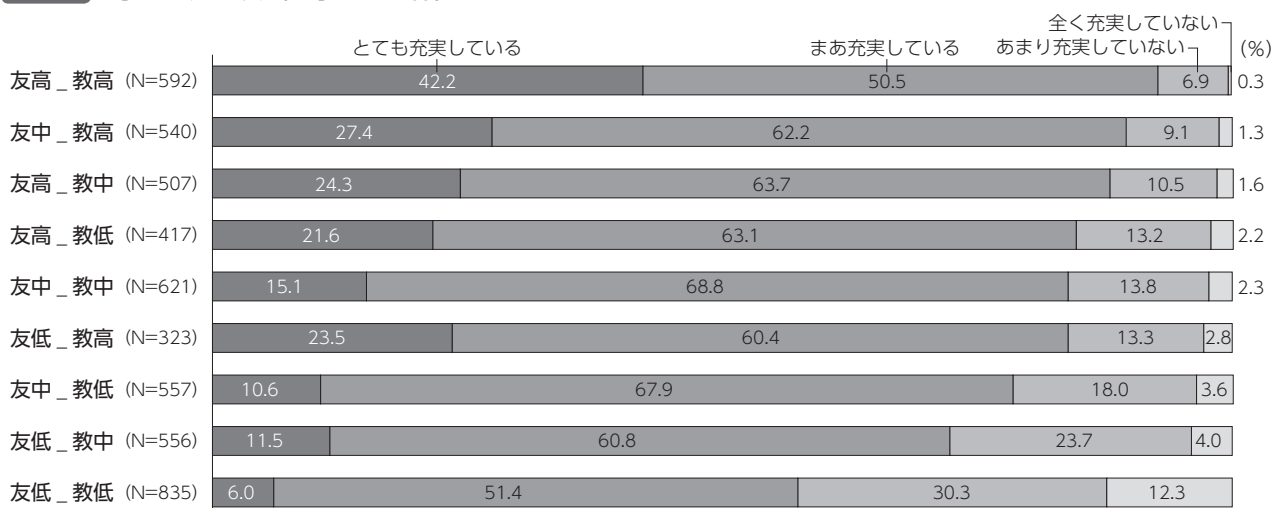
**図3-3** 大学生生活満足度



注1) 「とても」+「まあ」の多い順。

注2) 「判断できない」と回答した者は、分析から除く。サンプル数は4,810名。

**図3-4** 学びの充実度 (大学生活全体)



注) 「とても」+「まあ」の多い順。

## 2) “つながり” と学習意欲

次に大学における中心的な活動である学習と大学内の“つながり”との関係について、「学びの充実度」と「授業への関心・興味」への意識からみていくこととする。

まず、大学生生活全体をとおしての学びの充実度と大学内の“つながり”との関係についての分析結果を **図3-4** に示した。

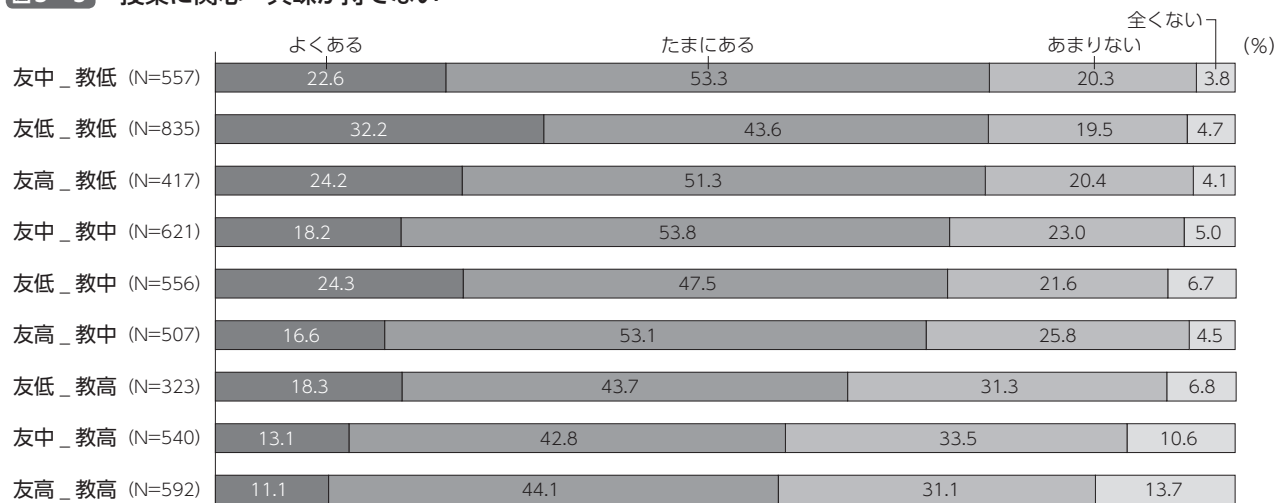
学びが「充実している (とても+まあ)」と回答した割合が高いのは、「友人高群-教職員高群」、「友人中群-教職員高群」、「友人高群-教職員中群」の順となっている。対して、学びが「充実していない (あまり+全く)」との回答割合は、「友人低群-教職員低群」、「友人低群-教職員中群」、「友人中群-教職員低群」の順となっている。学びの充実度についても、友人、教員、職員との“つながり”が多い学生ほど、学びが充実しているとの結果となった。

次に、授業への関心・興味と大学内の“つながり”との関係についてみてみよう (**図3-5**)。

「授業に関心・興味が持てない (よくある+たまにある)」と感じているのは「友人中群-教職員低群」、「友人低群-教職員低群」、「友人高群-教職員低群」の順となっている。一方、「友人中群-教職員高群」、「友人高群-教職員高群」については「授業に関心・興味が持てない」に対して「ない (あまり+全く)」との回答割合が高くなっており、友人や教職員との“つながり”が多い学生ほど、授業への関心・興味を維持できている様子がかがわれる。

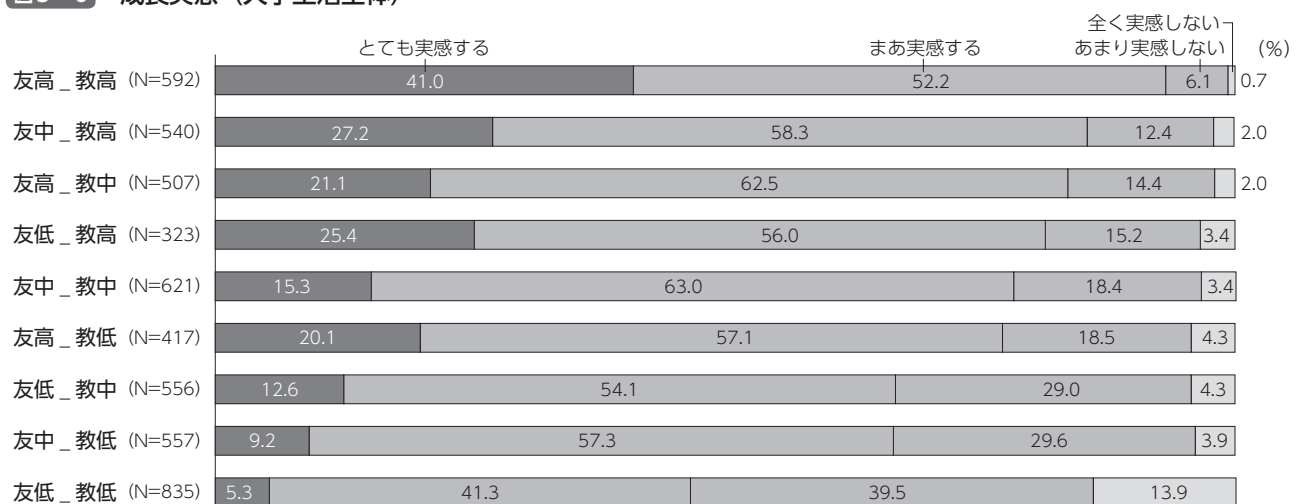
さらによく見てみると、授業への興味・関心は、友人との“つながり”よりも、教職員との関係の多寡に左右されていることが分かる。友人との“つながり”が「低群」であっても教職員との“つながり”が「高群」であれば、「授業に関心・興味が持てない」とは感じない学生が多くなる。反対に、友人との“つながり”が「高群」であっても、教職員とのつながりが「低群」であると、授業への関心・興味が持てないと感じる学生の割合が高くなっている。大学教育の中心ともいえる授業に学生が

**図3-5** 授業に関心・興味が持てない



注) 「よくある」+「たまにある」の多い順。

**図3-6** 成長実感 (大学生生活全体)



注) 「とても」+「まあ」の多い順。

コミットメントするためには、教職員、とりわけ教員の日ごろからの学生とのかかわりが重要となってくるものと思われる。

このように授業への関心・興味を持っていない学生は、大学内の友人との“つながり”が希薄な学生に多くみられている。一方で、授業への関心・興味が持てないとは感じていない学生は、大学内に多くのネットワークを持っており、友人との“つながり”の多寡は、学生の授業へのコミットメントや学習意欲にも少なからず影響しているものと考えられる。

### 3) “つながり”と成長実感

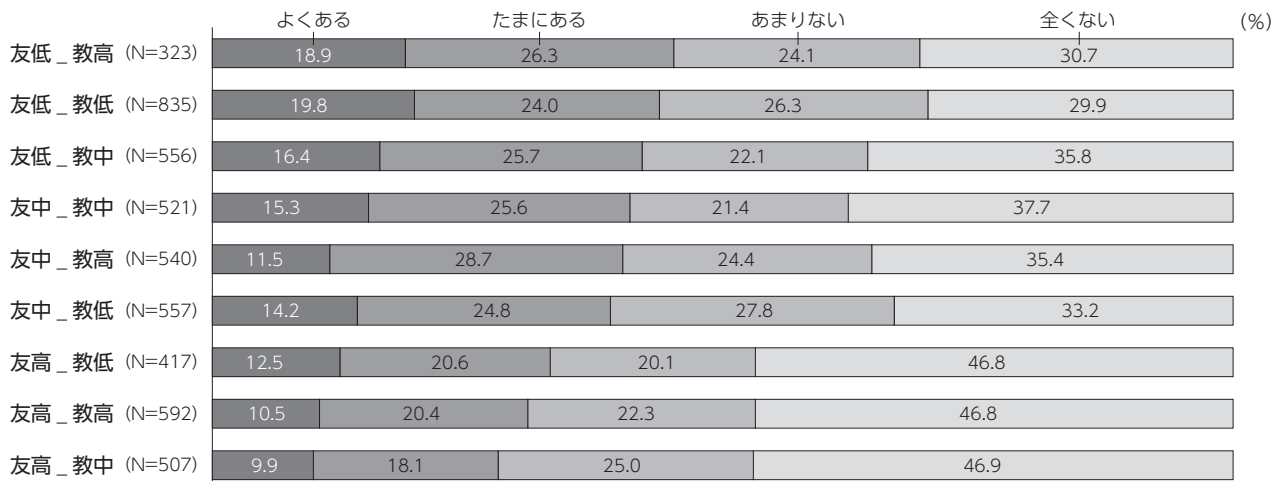
続いて大学内の“つながり”と成長実感との関係はどのようなになっているのかをみてみよう (図3-6)。

大学生活全体を通して成長した実感があると感じている大学生は、「友人高群-教職員高群」、「友人中群-教職員高群」、「友人高群-教職員中群」となっており、友人、教職員との“つながり”が多い大学生ほど、大学生活を

通して自分自身が成長したという実感を持っている。反対に、成長した実感がないのは、「友人低群-教職員低群」、「友人中群-教職員低群」、「友人低群-教職員中群」となっており、大学内の人間関係の“つながり”が希薄な学生ほど、成長実感を持っていない。特に、「友人低群-教職員低群」については、5割以上の学生が成長の実感が「ない(あまり+全く)」と回答している。「友人高群-教職員高群」の9割以上が成長実感を持っていることと比べると、大学内の“つながり”のあり方は、大学生の成長実感に大きく影響しているものと考えられる。

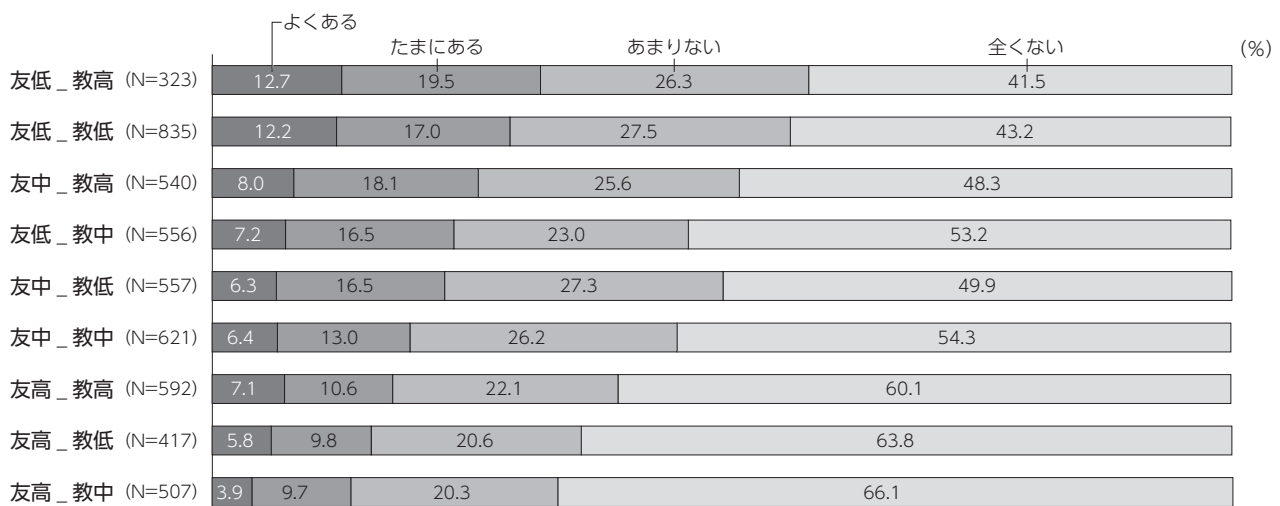
自分自身が「成長した」という実感は、大学生たちの大学生活を充実させるだけではなく、就職活動の際や社会人になるにあたっての大きな自信になるものと考えられる。同世代のみならず、異世代も含めた多くの人たちとかかわることは、多様な価値観との出会いにもなり、同時に自分自身を客観的に見つめ直す機会にもなりうる。“つながり”の多寡が、大学生の成長実感に影響している背景にはこのような理由も考えられるだろう。

図3-7 他の大学に入り直したい



注) 「よくある」+「たまにある」の多い順。

図3-8 大学を辞めて大学以外の進路に変更したい



注) 「よくある」+「たまにある」の多い順。

#### 4) “つながり”と大学からの離脱意識

これまでみてきたように、大学内の友人、教員、職員との“つながり”は、大学生の大学生活を豊かにし、学習意欲や成長実感にも大きな影響を与えていることが明らかとなった。大学生にとって、人間関係のネットワークが大学内にしっかりと根付いていることは、大学にコミットメントし、学業にもしっかりと取り組み、それらの活動を通して自分自身が成長したという実感を得ることにつながっているものと考えられる。それでは、大学から離脱しそうな学生はどのような“つながり”の状況なのだろうか。

まず、「他の大学に入り直したい」と大学内の“つながり”との関係について見ていこう。結果を **図3-7** に示した。

「他の大学に入り直したい」と思うことが「ある（よく+たまに）」と回答している割合が高いのは、「友人低群-教職員高群」、「友人低群-教職員低群」、「友人低群-教職員中群」となっている。一方で、「他の大学に入り直したい」と思うことが「ない（あまり+全く）」割合が高いのは「友人高群-教職員中群」、「友人高群-教職員高群」、「友人高群-教職員低群」となっている。

続いて「大学を辞めて大学以外の進路に変更したい」と大学内の“つながり”との関係についてみる (**図3-8**)。

「大学を辞めて大学以外の進路に変更したい」と思うことが「ある（よく+たまに）」の割合が高いのは「友人低群-教職員高群」、「友人低群-教職員低群」、「友人中群-教職員高群」の順となっている。

大学以外への進路に変更したいと思ったことが「ない（あまり+全く）」の割合が高いのは、「友人高群-教職員中群」、「友人高群-教職員低群」、「友人高群-教職員高群」の順となっている。

「他の大学に入り直したい」、「大学を辞めて大学以外の進路に変更したい」の両方とも、友人関係が「低群」である学生が離脱を考えており、友人関係「高群」は離脱を考えたことが「ない」と思っている割合が高い。大学からの離脱を考える理由は、経済的理由や健康問題等、さまざまであろうが、友人との“つながり”の薄さが離脱への背中を押してしまう一因となっているものと推測できるだろう。翻って言えば、大学内の友人との“つながり”を多く持つことで、大学からの離脱を引き留める可能性もあるものと考えられる。

大学内の人間関係の“つながり”は大学生活を豊かにする。もちろん、知り合いの数が多ければいいというものではないし、一人でいることが好きな学生もいるものと思われる。しかし、“つながり”が弱い学生にとっては、

「何かあった時」、「困った時」、「悩んだ時」に有益なアドバイスをくれたり精神的な支えになってくれたりする人がおらず、大学から離脱してしまうこともあるだろう。大学生が大学生活を難なく継続し、学習成果を積み重ね、しっかりとした大学での学びの成果と成長実感といった大学教育の「アウトカム」を持って社会へと羽ばたいていくためには、大学内における多様な“つながり”が重要であるといえるのではないだろうか。

#### 4. “つながり過剰”という陥穽

大学生活における友人関係の重要性についてはこれまで述べてきたとおりである。しかし、その一方で、近年においては直接対面しての付き合いに加えて、SNSでも友人と24時間つながり合うことが可能になったことから、大学生の友人関係が、“つながり過剰”になりかねないという結果も得られている（図表割愛）。

今回調査において、「毎日友だちが何をしているか、SNSやLINEで知っている」という問いに対して、「あてはまる（とても+まあ）」と回答した大学生の割合は41.2%であった。4割以上の大学生は、SNSやLINEでつながり合い、お互いの行動を把握し合う関係を築いている。また「友だちと話が合わない」と不安になる」に対して「あてはまる（とても+まあ）」と回答した割合も、前回調査から14.9ポイント上昇しており（前回42.0%→今回56.9%）、大学生たちは少なからず、友人との付き合いに対して、話が合わないことのないように気を遣っている様子が見られる。

現代の若者たちは、周囲の人間と衝突することを極端に恐れる傾向がある。なぜならば、ちょっとした友人関係のバランスの崩れが、「仲間外れ」や「いじめ」につながることを彼らは知っているからである。そのため、過度に友だちを気遣い、対立しないように「空気を読み」合う「優しい関係」を構築する傾向があるという（土井2008）。大学生たちをとりまく、こうした状況が、コミュニケーション・ツールでもある携帯電話、スマートフォンといったメディアの普及と相俟って、常に友だちとつながり合い、相手を不快にさせず、自分も不快にならないように気遣い合う人間関係を作っているものと考えられる。

大学生を含む若者たちが人間関係、すなわち“つながり”を構築する上で、現代社会特有の問題があるとはいえ、友人との“つながり”は、彼らにとって人とのかわりをおして自己を成長させ、集団の中で生きる術を身につける重要な役割を持っているものであると考えられる。



## 5. 大学生活における“つながり”の重要性

現代のように、変化が速くグローバル化の波が押し寄せてきている社会で生き抜くためには、性別、年齢、居住している地域、国籍、階層、趣味嗜好といった様々な違いを乗り越えた人間関係の構築が必要である。こうした多様なバックグラウンドを持った人々と、一定のルールのもとで信頼し合い、豊かな人間関係、すなわち“つながり”を築くことは、充実した人生を送るだけでなく、社会を構成するメンバーとして、社会の発展にも寄与することにつながる。大学時代に多様な人々とつながり合うことから、大学卒業後の長い人生にわたっての人間関係を築く上で必要なことをたくさん学ぶことができると思われる。

よき友だちの存在は、学校生活を豊かにし、その後の人生をも豊かにする。幅広い人間関係を構築し、多様な人々とのネットワークの中で生きていく、そのためには、お互いに息苦しさを感じるような閉じた人間関係ではなく、多様なバックグラウンドを持つ他者の存在を認め合うことのできる、開かれた関係性を作ることが重要になってくるだろう。前述のような、インターネット社会における“つながり過剰”という問題点もあるとはいえ、インターネットという文明の利器も上手に活用することで、人間関係づくりの最大の味方になることができると思われる。そのためには、メールやSNSなどにおける過剰な“つながり”による「優しい関係」といった息苦しい関係性ではなく、開かれた人間関係を円滑に保つために必要な方法論を学ぶことも必要になってくるものと思われる。

人生の中でも比較的自由に時間を使うことが可能な大学時代において、友人や教員、職員、さらには大学内にとどまらない幅広い人間関係を構築し、付き合いを深める時間を持つ。そして、人間関係のポジティブな側面もネガティブな側面も併せて自分自身を客観的に見つめ直し、多様な価値観を学ぶ機会にする。このような経験が、社会に出てから、仕事の面でも社会生活の面でも、コミュニティの中で他者と協同的に生きていく術を身につけて

いく礎になるのではないだろうか。こうして考えてみると、人間関係＝“つながり”という一見、大学教育の本質からは距離があるように思えるものが、実は大学教育の根幹にかかわる重要なものであるということがわかる。

しかし、今回調査においては、「ふだんの時間の過ごし方」のうち、「友だちと会う、遊ぶ」が「0時間（やっていない）」と回答した割合が、第1回調査（2008年）では6.7%、第2回調査（2012年）では6.6%であったのに対し、今回調査においては12.7%と倍増しているという結果になっており、友人付き合いの時間が減少しているという結果になった。この原因を特定することは容易ではないが、友人と遊ぶ時間よりも他の活動に費やす時間が増えているということになるのだろう。

大学生活における大学内の“つながり”の豊かさは、友人のみならず、教職員も大学生の大学生活、学習、成長実感に大きく影響している。大学教育という観点からすると、大学生の大学内の人間関係は大学生の学習面や大学生活全体を通しての成長といった点からは距離があるように思えるかもしれない。しかし、こうした“つながり”があつてこそ、学習面の充実や学生の成長を目指した大学改革が生かされ、根付くのではないだろうか。そのためには、大学生たちが大学生活の中において、豊かな“つながり”を作ることができるように、時間的、精神的な余裕が持てる環境が必要である。大学生たちが自由に交流できるような場所を大学内に作ったり、人間関係の広がりや得られるような機会を提供したりすることも一案であろう。加えて、大学生たちの“つながり”の重要な要素でもある教員、職員たちも、ゆとりを持って大学生たちと関わる時間を持てるような環境整備も必要である。

大学改革によって、学生も教職員も多忙化し、時間的にも精神的にも余裕をなくしてしまつては元も子もない。大学改革を真に有益なものにするためにも、大学内外で豊かな“つながり”を育むことができるような、時間的・空間的な環境整備が必要なのではないだろうか。

### 参考文献

- ・ Bourdieu, Pierre 1986 “The Forms of Capital,” in John G. Richardson, ed., *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Greenwood Press.
- ・ Putnam, R. 1993 “Making Democracy Work” Princeton University Press (河田潤一訳 2001『哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造』NTT出版).
- ・ 土井隆義 2008『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書.
- ・ 志水宏吉 2014『「つながり格差」が学力格差を生む』垂紀書房.
- ・ 山田剛史 2013「現代学生の「移動」問題－在学中に進路変更を希望する学生の実態と背景－」『第2回大学生の学習・生活実態調査報告書』Benesse教育研究センター, p.20-21.